

PETボトルリサイクル推進協議会の近藤方人さん、宮澤哲夫さんをお招きして、ペットボトル to ペットボトルリサイクルの今後の展望についてお話を伺いました。

■テーマ『ペットボトルリサイクルの現状を聞く!—ボトル to ボトル・今後の展望—』

【日 時】 2013年5月22日(水) 14:00~16:30

【場 所】 飯田橋セントラルプラザ 16F (A)

■講演のポイントは、以下のとおりです。

- ・PET樹脂の特徴は、酸素を多く含むため、燃焼時の発熱量は紙と同水準、ポリプロピレンの半分程度である。このため、エネルギー回収よりも、素材としてのリサイクルに向いている。
- ・内容物によって種類が異なる(耐熱・耐圧、無菌充填、耐熱圧)。最近、無菌充填タイプが増えており、軽量化が進んでいる。
- ・PET樹脂は、ボトル成形⇒再生フレーク⇒繊維シートと分子量が低下する。ボトル to ボトルを行うためには、樹脂の分子量を高めるためのエネルギーが必要となる。
- ・PETボトルリサイクル推進協議会は1993年設立。現在、3Rの自主行動計画を推進している。
- ・リサイクルに適さない、輸入品の着色PETなどは、輸入メーカーへの働きかけを行っている。
- ・2011年度は、市町村と事業系合わせて65.4万tの回収量で国内の推定利用量は26.5万t。海外輸出32.4万tがリサイクルの課題である。

■主な質疑、意見交換の概要は以下のとおりです。

○PETボトルのポイ捨てを止めさせるにはどうしたらよいか?

→小型のPETボトルを市場に出す時に心配したが、PETボトルのリシール性もあって、現時点では、それほどではなかった実感がある。リサイクル率は85%もあり、散乱ごみは少ないはず。

⇒単純に、米国や欧州の数値を比較するのはどうか。米国は州により異なり、欧州も国によりシステムが異なる。平均ではなく、米国の優れた州や欧州の優れた国との比較をするべきである。

○ベールになるまでの費用負担をどう考えるか?

→システムとしての考え方なので、今後の議論になる。税金であれ、事業者負担であれ社会的コストであり、社会的コストを減らすという視点で考えたい。

○PETボトルのリユースができないか。水であれば可能ではないか。

→協議会としては、中身の安全が第一で、その上で環境負荷を減らしたい。欧州より日本のほうが安全衛生に厳しいので、技術的に難しい。

○なぜ、デポジットを採用しないのか?

→PETボトルを導入する段階ならまだしも、85%のリサイクル率のあるなかで、新たなシステムをつくる価値があるとは思わない。

○社会的費用の低減につながるものだが、一部の流通事業者では、店頭回収を進めており、民間ベースでできることがあるのではないか。

→流通の社会的責任として取り組んでいることと認識している。金銭面のバックアップは考えていない。コンビニや自動販売機での回収ボトルの品質向上は課題と考える。

○実質的な回収量が65.4万tで、リサイクル率の分母60.4万tより多いのは変ではないか?

→65.4万tは、キャップ・ラベルを含む回収量の合計である。60.4万tはキャップ・ラベルを含まない販売量で、含む場合には69.7万tになる。

(文責/3R全国ネット事務局 2013年5月30日)